

久しぶりの九州場所は・・・

9日目までは全勝の新横綱照ノ富士に大関貴景勝・関脇御嶽海と阿炎が追走して、面白い展開を感じさせた。しかし貴景勝・御嶽海が脱落していき、照ノ富士の全勝優勝になってしまった。

久しぶりの九州場所だったが、熱戦の数よりも淡泊な相撲の方が多く、賜杯争いも何となく先に結論が見えてしまっているような感じがあり、面白さに欠ける場所だったような気がする。

<照ノ富士>

照ノ富士は、足の開き方と膝を曲げた前傾姿勢の確保を貫き、立ち合いで右か左かいずれかのまわしを素早くつかみ、攻めの確かさが際立っていた。前傾姿勢の時には左右の足が前後に開き、足が揃うことはない。また、相手に十分に相撲を取らせながら自分の形に持って行くという、守りからの攻めも光っていて、他の追隨を許す相撲ではなかった。このような相撲を取っていくと、現在の状況では対応出来る力士は少ないかもしれない。離れて相撲を取り懐の深い力士か、素早く動き回りながら様々な技を繰り出すことが出来る力士でなければ、この横綱を倒すことは出来ないかもしれない。膝が悲鳴を上げない限り白星は付いてくるような気がする。

<貴景勝>

貴景勝は頭から当ることが出来る元通りの相撲が戻ってきたように見えた。低い重心からの突き押しが出るようになり、前進しながらなので破壊力があつた。相手との間合いを上手く測りながらの前進もあり、慎重に自分のスタイルを進めているように見えた。腰の構えが良く、おっつけが上手く前進力のある明生に敗れたのは相撲の型からすればありそうな感じはしたが、阿炎に敗れたのは意外だった。

腰高で伸び上がって相撲を取る阿炎は、胸から腰まではがら空きの状態で、貴景勝のような低い位置の攻めを得意とする力士には持ってこいの存在のはずだが、威力に圧倒された。先手を取って胸か腹に数発打ち込めば難なく押さえられるような気がするのだが。

<御嶽海>

御嶽海は9日目まで1敗と期待を持たせたが、宝富士・遠藤に敗れて優勝争いから脱落し、優勝争いをつまらないものにしてしまった。照ノ富士と対戦する13日目にはすでに3敗しており、しかも良い所なく敗れてしまった。良い相撲と悪い相撲がはっきりしており、不利な体勢になった時に粘ることもなく敗退するというこれまでのパターンが踏襲された。平成28年11月場所で新小結になって以降、平幕に下がったのは三場所だけで、小結が関脇かに必ず座っている。このまま名関脇として名を残すか、それとも一段飛躍するか、間もなく29才、チャンスはいつまでもはないと思うが。

<玉鷲>

玉鷲は幕内最高齢の37才、伸びやかな突き押しに足の運びもピタリと決まり、11日目まで2敗で賜杯争いにも加わった。このまま行ってまた何か・・・と思っただが、終盤になって上位や好成績者にあてられて9勝6敗に終わった。両手をついたきれいな立ち合い、年令を感じさせない前進力と両手がよく伸びた突き押しには力強さのほかに美しさもあった。

<宇良>

宇良は平成29年3月場所新入幕で8勝7敗、それから数場所で幕内上位に進出したが膝を負傷して休場しているうちに序二段まで陥落。先々場所(7月場所)ようやく幕内に復帰し、今場所は三場所目になる。休場治療の後、体を作り直し小兵の業師から正攻法の相撲が取れる力士に変身した。

考える・動く・攻めるで、技能賞を獲得。妙義龍・遠藤・志摩ノ海などの技巧派力士が不振だったこの場所を支えた感じがした。

<阿炎>

出場停止処分により西幕下56枚目まで陥落した阿炎が、幕下二場所連続優勝と十両優勝とを果たして

再入幕した。休場前よりも体が大きくなっていて、贅肉ではなく筋肉のようだった。棒立ちで伸び上がったの突き押しが、前傾姿勢を保ちながらの突き押しに変化していた。

13日目まで1敗を堅持して、前頭15枚目ながら横綱大関戦も組まれることになり、12勝3敗に終わったが、敢闘賞を手にした。北勝富士に敗れた1敗が示すように、低い姿勢で下から上へと押し上げるような力士には弱い。前述の様に、長身で長い手を前に伸ばすので、胸から腰まではがら空きになる。ここへ素早く攻撃できる力士にとっては怖い存在ではない。これまでに比べると、膝を曲げて腰を落として前傾の姿勢が増えては来たが、これをさらに進化させないといけない。

また、突きと押しを繰り返しながら運んでいる足がいつもつま先立っている。小さな底面積で重量（自分の体重と相手の突進力）を支えることになり、突き押しの威力が減ってしまうし、足の怪我にもつながりやすいので改善の必要があると睨んでいる。

<しめくくり>

今場所は、幕内では阿炎が活躍し、幕下では竜電が優勝した。

あと三場所休場の朝乃山は恐らく幕下まで陥落すると思われる。休場の間、稽古を重ねていたとすれば復帰後に、幕下優勝・十両優勝を経て戻ってくると考えられる。

幕下以下の番付には、大学や高校の相撲選手から所定の番付に付け出されて入ってくる力士もいる、怪我をして上位の番付から陥落してきた力士もいるし、さらに昨今のように不祥事で休場を余儀なくされた力士もいる。近頃めっきり人数が減ってきたと言われる一番出世・二番出世から星を一つずつ積み上げて上がってこようとする若い力士達には過酷な感じもする。何か方策はないものかと思うのだが、勝負の世界ゆえ致し方なしということだろうか。

以上